

鈇

子

房総に大型動物の化石

日本はアジア大陸の東端

人類の誕生は約二百万年前ともいわれ、化石となった人骨がアフリカで発見されている。東アジアでは、中国の北京南西にある小都市、周口店近くで発見された北京原人が最も古く、五十万年前とされている。

旧石器時代では、原始生活しており、土器はなく、打ち欠いた打製石器が主となっている。

日本では戦前まで、旧石器時代の存在は確認されていなかったが、昭和二十三年に群馬県新田郡笠懸村の岩宿遺跡から、槍先形石器がローム層中から発見されたことから全国的に精査され、現在では数千カ所近くが確認され、千葉県でも約五百ヶ所以上が知られている。

銚子でも、屏風ヶ浦の台地上で旧石器時代の石器としてスクレーパーが表面採取されたことが、三崎町三丁目遺跡発見の端緒となった。

約二百万年前の時代には、現在の地形とは異なり、海水面が後退し、日本列島をはじめ台湾まで、また朝鮮半島とも結びあい、ユーラシア大陸の東端に位置していた。

先石器時代の三崎町三丁目遺跡

旧石器時代を今は「先土器時代」とも呼び、約数十万年前から一万年頃まで、地質学では最新世で、普通に洪積期と親しまれ、日本は大陸の一部であり、肉食獣を追って、先土器時代の人々は、現在の日本列島各地に拡散したと考えられている。

大陸の草原地帯に生息していたナウマン象や、オオツノ鹿、ヤギユウなどの大型動物の化石も発見され、県下ではナウマン象の化石が香取郡下総町や、印旛郡印西町や印旛村でも発見されて、千葉県立大利根博物館と千葉県立房総風土記の丘に展示されている。

関東地方を取りまく箱根山、赤城山、榛名山等の火山活動が盛んで、広い範囲に降灰し、その堆積物が関東ローム層で、乾燥すると天高く舞い上がり、雨が降ると泥々となり、堆積すると固くなる地層である。

洪積台地の常総、下総台地上に先土器時代の人々の生活跡が認められ、銚子半島の南部に位置する下総台地や、太平洋に面した国道一二六号線の南側に遺跡が存在する。

発掘調査により、ユニットの石器群、遺物ではナイフ型・尖頭器・削器や石核等、先土器遺跡の石器が多数発見されている。